



第6回全道フットパス大会

歴史好きの視点で町を見つめたら
 小川●空知管内の南幌町を中心にフットパス作りを精力的に進めていますね。そういった話をはじめ幅広い活動を語っていただけたいと思います。

近藤●平成12年から南幌町開拓の基点でもある国道337号沿線(通称8号通商店街)の人々107名が中心となって、歴史を活用し景観を生かした街づくりを進めることを目的とした南幌街なか活性化委員会が設立され、その代表に推されました。

同時に札幌開発建設部と地元住民が一緒に進めるボランティア・サポート・プログラム(VSP)「運河・駅通ロード」の代表もさせられました。この種の活動としては札幌周辺でも一番早い方だと思います。それだけでなく公民館活動の一環として、子どもを対象に防風林をフィールドにした植物観察、幌向運河での水生生物調査、ゴムボートによる運河下り、さらにはピオトープの手法によって在来環境の復元などにも取り組んできました。

小川●すいぶん幅広いですね。郷土の歴史を調査する活動はいつ頃から始めたのでしょうか。

近藤●歴史への関心は高校時代、歴史の担任だった広瀬先生に強い影響を受けました。大学は法学部に進んだものの、歴史への夢捨て難く、同時に歴史の勉強もしました。

ふるさとへ帰ってからは、郷土の歴史に対する関心も高まり、さまざまな調査に関わりました。特に町内に残存する幌向運河や駅通の調査、研究をするようになりました。現在空知地方史研究協議会、北海道歴史研究会に所属して学んでいます。

小川●幌向運河についてももう少し詳しく説明して下さい。一般にはあまり知られていないと思いますので。

近藤●有名な京都の疎水事業を完成させた京都府知事北垣国道が北海道庁第4代長官となり、着任早々(明治27年)から計画に入り、翌年から運河開削の指導を始めました。明治29年に完成したのは、石狩平野に掘られた4大運河(幌向、馬追、山口、創成川)の一つです。

小川●開拓が始まったばかりの幌向にまたなぜ運河を。

モーリー・インタビュー [エコ最前線] ①9

地域の特徴をとらえ、都市と農村の懸け橋に

幌向運河を生かしたフットパスを開発
 近藤 長一郎さん



植物学習

こんどう ちよういちろう
 1942年夕張郡長沼町生まれ。日本大学法学部卒。1974年長沼町アトリエ村事務局長として文化村の礎を築く。2000年南幌町街なか活性化委員会代表(地域の街づくり運動と運河下り)。札幌開発建設部VSP「運河・駅通ロード」代表(清掃、花植え)。2005年より北海道フラワーマスターとして活動中。2006年からフットパス運動を展開し、現在「ふらっと南幌フットパス歴史ボランティアガイド」。

インタビュー◎小川 巖(モーリー編集委員)

いけないですね。
 近藤●車ではなく、ゆっくり歩いてもらうことで農を中心とした地域の良さを感じてもらえますから。つまりフットパスに食とか温泉を加えれば、南幌らしいフットパスになると気づきました。

ゴムボートで運河下り、個性派フットパス
 小川●歩いて汗を流して終わりとか、自分の健康だけを考えるというのではなく、景観、農、食を通じて地域の活性化につなげていく発想ですね。
 近藤●それが究極的には体験・交流型観光の商品化につながればいいな、と思っています。

小川●地元の人たちの反応はどうですか。
 近藤●2年前に本格的なフットパス歩きを始めた頃は、町民の反応は芳しくありませんでした。歩くイベントを重ねていくうちに、地元の産品をたくさん買ってくれるようになり、ただのウォーキングとは違う、と気づくようになったのは。今年から毎月第3日曜日に定例のウォークをやるようになったせいもあって町民の参加も増えてきました。



近藤●最大の目的は排水です。運河ができれば物資や人を運べるし、まさに一石二鳥というわけです。北海道の拓殖計画の中で、道路、鉄道、港湾とともに大きな役割を担ったのが運河と言えます。ところが明治31年に北海道全域を襲った大水害によって土砂が川に入り当初の使命を果たせなくなりましたが、この運河のおかげで、幌向駅通が明治43年に誕生したと言えるでしょう。北海道の開拓史の中で、川と駅通とのつながりを考える上で道民にとっても大切な歴史遺産と言えます。

小川●ところで南幌町ってどんな街ですか。札幌に近いわりにはあまり知られていませんので。

近藤●三方が旧夕張川、新夕張川、千歳川に囲まれたフラットな町です。石狩低地帯のほぼ真ん中に位置しています。札幌から高速バスでわずか45分で着きます。

小川●札幌のベッドタウンとしての性格を持っていると思うのですが、農業の町でもありますね。

近藤●そうですね。都市近郊にありながら、農業が基幹産業になっています。都市にない田園景観が自慢です。有機農業に積極的に取り組む農家も多いんですよ。米だけでなく、トマト、カボチャ、キャベツ、トウキビ、アスパラガスといった野菜づくりにも力を入れています。

小川●そういえばキャベツキムチは、南幌ジンギスカンとともに有名ですね。話は変わりますがフットパス作りを始めたきっかけはなんだったのですか。

近藤●平成17年の夏に「いにしへの道(勇払越え)」の調査が行われました。かつてアイヌの人たちが川を伝って、一部は舟を担いで通行したことが明らかになり、そのルートを歩けないかと考えたのが始まりです。

小川●歴史的な関心がフットパス作りの原点というわけですか。

近藤●それとフットパスが地域の活性化に結びつくのでは、と考えましてね。田園地帯の多い南幌町の中を歩いてもらうことで、農耕地はもちろんのこと、農地を守る防風林、北海道幹線水路などに触れ、さらに農村と都市の交流の懸け橋になればいいと。

小川●それには足元の地域資源をしっかり見据えるところから始めないと

小川●以前からゴムボートで運河を下るイベントなどをやっていますね。
 近藤●平成12年頃から夏に水位の状況を見ながら川下りイベントを続けてきました。

小川●誰でも参加できるのですか。
 近藤●幌向運河を広く知ってもらうのが目的ですから、どなたでも参加できます。これまでは20隻前後のゴムボートを用意して、特に子どもとか障害者を持っている人と健康者が一緒になって乗る楽しさを体験してもらっています。

小川●行政との関係はどうですか。
 近藤●報告はその都度行政に伝え、活動内容を知ってもらうよう努めています。特に都市と農村の交流が進むにつれ、行政の関心が高まっているように感じます。

小川●最近では冬に歩く活動を本格的に始めたとか。
 近藤●毎月第3日曜日に実施する定例ウォークの冬バージョンとして、かんじきウォーキングを今年3月にやったところ、広大な雪原を気持ちよく歩けると大好評でした。南幌らしいイベントとして定着させたいと思っています。

小川●札幌に近いという利点をとことん生かす、ということですね。
 近藤●既にお話ししました通り、大都市に近い点を最大限に生かして「農村と都市」の共生の手段としてフットパスを生かした活動を進めています。例えば収穫祭と結びつけたフットパスであったり、土と触れるフットパスであったり。さらに田植えなど農業と結びつけて体験につなげられればと考えています。

小川●近い将来に向けたプラン、アイデアなどあればどうぞ。
 近藤●いろいろあるんですよ。かんじきフットパス大会などはすぐにもやりたいですね。また札幌市内から野幌森林公園を通して南幌に至るコースも作りたいし、さらに馬追山、長沼方面につながるフットパスも早く作りたいとみんなで知恵を絞っているところです。